特質に對し、ラムも大言壯語はきらひであつた。決して自分を豪いものとして上段にかまへた事はない。「除夜」の一文中に「私は彼（エリヤ）を輕薄な虛榮な氣まぐれな奴」といつて居るが、いつでも自分をさういつた風に取り扱つて居る。

九

しかしラムは前にもいつた通り、決して他人や世間を相手にはして居ない。それ等から超然として居る。政治は素よりその相手とする處ではない。時代の思想なんていふものも、恐らくその考へを煩はした人ではなかつたらしい。當時世は擧つて自由とか平等とかいつて居た。ラムの親しく交はつた連中で、一人でもかやうな思潮に染まなかつたものはない。親友コオリッヂでも、ワアヅワアスでも、ハズリットでも、ハントでも皆さうであつた。しかもラムは超然として居た、その書きものに、そんな風の殘つて居るものは一でも見當らない。よしあつた處で大言壯語はして居ない。乞食を禮讃した初めに「私はこの乞食に向つて宣戰された要らざる世話の十字軍、一掃軍とでもいつたやうな卸なみのやり口に贊成は出來ない」といつて、いはゆる社會改善の業なるものに異議を稱へて居るが、ラムは如何なる場合にも、こんな風に靜かな口調でいつて居る、さらに超然として居るから、綠雨君のやうな冷笑冷罵的な態度もあまりない。この上下共に自由平等なる時代の風潮に動かされて居た時にあ

たつて少しもその風に染まなかつた文人は、詩人でキイツ、散文でラムといはれて居る位であるが、それで居てこの二人が、當時の詩と散文の兩界にわたつての第一人者となつたのを想へば、時代の風潮とか、思潮とかの、如何に顧るに足らぬものであるかを知るに足りるであらう。この超脫したるラムに所謂偉大なるカアライルが面會して、變な奴だと一言に片づけて居るのは、如何にもよく兩者の面目を躍如たらしめて居るものである。年の若い植村正久といつたやうな人があつて、それが綠雨君を訪門したらさぞ面白い事であつたらうと思ふ。實際私にいはせれば、カアライルはラムよりも幾枚か役者が下である。

綠雨君をラムに比べて、もつとも相違して居ると思はれる處は、金錢の事についてである。失禮ながら綠雨君はいつも金に餘裕はなかつた、少くとも私の親しくして居た時代の綠雨君はさうであつた。隨分貧乏でもあつたが、貧乏であつたといふよりも、有れば有るだけの金を綺麗に使ひ果して、餘剩をおかなかつたといつた方がよい。それ故いつでも手元に金のあつた例は先づない。そんなわけからであらうか、私にはわからなかつたが、君はよく私の下宿して居る處へたづねて來て、これから暫らく逃亡するから、その積りで居てくれといつて、何處ともなく行衛をくらます事か往往あつた。それは君自らの說明する處によると、高利貸の催促をさけるのだとあつた。それからもとより綠雨君には

仕事に精勤するといふやうな風は毛頭なかつた。藤村君は嘗て私に、明治の文壇における最初のテカダンは齋藤君だらうといつた事があつたが、如何にもこれは名言だと私は思ふ、それほど齋藤君は仕事に勤勉な處はなかつた。それはもちろん文字文章に齋藤君が忠實でなかつたといふのではないが、俗務としての仕事に勵む人ではなかつたといふのである。齋藤君がこんな風であるに對して、ラムはまた正反對な人である。ラムが南洋會社に入つたのは十四五歳の頃で、それから東印度會社を退いて年金を給與されるに至つたのが五十歳、その間三十幾年、ラムは十年一日の如く勤勉であつた。仕事に勤勉であつたから金錢に對しても忠實であつた。金錢に忠實とは無駄な金をつかはなかつたのである。最初は母や姉を、後には姉一人を支へるために、僅かな給金で隨分苦しい生活をしたらしいが、それでもごうやらやつて行き、他人の世話にもならず、後には少し位の金はあまし得て、やがては隨分人のために補助をもしてやる程になつた。兎に角ラムは貧乏でもあつたが、金には困りもしなかつたらしい。古渡りの陶器だか磁器だかを買つたり、古本を漁る位がその道樂であつたらうが。他には別に金をつかふ事もなかつたらしい。孰れにしても金錢上の事については品位をまもり得たらしい、この點もまた綠雨君とまるで反對に見える處の一であるが、ここに一寸考へて見たい事がある。

一〇

一體齋藤君は極く頭腦の明晰な人である、大抵の事は初めから、よく見え透きまた見拔いて居た。それ故金錢の事についても同樣で、僅かな金を使ふにもその計算は初めから明瞭に立て得たのである。十圓の金を使ふ場合——小額ではあるが、當時の十圓は酒食に用ひ得るだけの値はもつて居た——には丁度それだけが過不及なく使ひ果されるやうな使ひ方をした。二十圓ならば二十圓、三十圓ならばまた三十圓といつた風に、綺麗にそれを使ひ果した。これは私共の一緒に食ひ歩いた時分に、實際その手際を見た處であつた。私はこれから推して、齋藤君に經濟の頭がなかつたとはどうしても思はれない。若しこの打算計量の頭をもつてしたならば、多分ラムのやうな安逸にして金に不自由するやうな事のない生活を爲し得たのではなからうかと考へたのであつた。それを左樣させなかつたのは齋藤君のデカダン的性格の爲めであつたのであらうか。この二人の正反對に見える點も、かう考へて見ると、實際はその目に見えた程ではなかつたのであらうと考へられる。

かういふ相ひ反した性格についてもラムは了解をもつて居たのではないかと考へられる節がある。といふのは私はこの金錢に關する問題から、計らずラムの「二種の人」(ザ、ツウ、レイセス、オブ、メン)の一文を想ひ出したからである。この文のはじめにラムはかういつて居る「人類は私のつくり得た最善の學說によると二種のはつきり異つた種族から成り立つて居る。則ち借りる人と貸す人とで

ある。この根本的の二種族に、ゴシツク族とか、ケルト族とか、白人とか、黒人とか、赤色人種とかいつたあらゆる要らざる分類は歸着してしまふのである」となし、人類はみなこの二つのいづれかに屬するといひ「前者（借りる人）を私は大民族（グレエト・レイス）と命名したいと思ふが、これはその姿、その態度、並に一種本能的な威光のあるのでよく辨別される、後者（貸す人）は生れながら下劣に出來て居る」といつて、兩者の容貌を記述し、「さらにあらゆる時代の最大な借り手であつた人を見よ――アルシバイアディス――フォルスタフ――サア・リチヤアド・スティル――我が比類なきブリンズリ等を見よ、この四人にはみな一族らしい似寄がある」と斷言して居る。フォルスタフは兎に角、スティルもなるほど借金家であつたらう。しかしこのブリンズリの代りに、また甚だ失敬な話であるが、我が綠雨君といふ字を入れて見たら、中中面白いものになると私には頗る興味がある。但しラムの書いて居るこれらの借金家の人相なるものは、綠雨君のとは甚だ相違して、綠雨君の人相はむしろラムの書いて居る貸し方のに近いと思はれはするが、兎に角この一文中に、ラムが書いて居る人の事に綠雨君はよく似て居る、そしてラムがさういふ人人に同情をもつて居る事、若くは了解をもつて居る事は、それを大民族といつて居るのでも察しられる。もつとも隨分それは皮肉ないひ方でもありはするが、借り手を贊して「なんと麗はしい信頼を天に向つて示して居る事よ――野の百合と同じ

く何の考慮をも爲さずに！如何に金錢を輕侮し、それを（特に貴下のと私のとを）鐵滓の如くに考へて居る！」と實は少少厄介視しては居るが、しかしさらに進んで、この類の人を以て、君のものは僕のもの、僕のものは僕のもの、といつたやうな考への人であるとなし、原始的共產の考へに接近して居るといつて、但し「少くともその主義の一半だけにわたつては」といつて居る。一半だけといふのは、共產の一半で、則ち他人のものは自分のものであるといふ一半で、自分のものも他人のものであるといふ共產主義の他の一半は實行して居ないとの意である。この種の人にあつてはたまらない、その網にかかつたらもう仕方がない。だから白羽の矢を立てられたら、もう往生して金を貸すが宜いと、讀者にすすめて居る、それから自分の知人であつた借金家の事を說き、その男は資產家であつたが、その財產をことごとく浪費してしまつて、借りまた借りるといふ大業を爲して居るといひ、その男と一緒に歩いた時、その知人の多いので自分はびつくりしたといつて居るが、それは實にその男に對する債權者なのである。しかもその男はそれが皆自分の財布に金を運んでくれる人だといつてすまして、むしろそれを自慢にして居るのである。こうなつて來ると私はこの人物の、その行動なり、人相なりの綠雨君よりもむしろ、すでに故人となられた某博士を想ひ出さざるを得なくなる。

一一

それはさておき私はここに宵越しの金は使はないといふ言葉の西洋にもある事を知つた、則ちその男はいつも、三日以上取つておかれた金は臭くなる Money kept longer than three days stinks といつて居たのださうである。私はうかうかと面白いので、ラムの文を讀んでは寫してしまつたが、實は齋藤君の借金の話しから聯想されて、そんなものを讀み出したのであつた。が、まことに怪しからぬ話であるが、こんな事を書いても齋藤君は怒りもしまいと思ふ。丁度ラムの書いて居る男が債權者の多いのを自慢にして居ると同じ事實として言ふのであるが、私が嘗て齋藤君の下宿して居る處へ行つた時、室に商人らしい男が、さもなれなれしく座り込んで世間話をして居た、私もその傍に座つて話の仲間に入つたが、暫らくしてその男は行つてしまつた。すると齋藤君は私に向つて、今の男を何者だと思ふと私に問ひかけて、すぐにアレは高利貸だヨ、ああ柔らかに來る奴には全く困るんだといつて、說明を加へてくれた。高利貸といへば、狼か虎のやうな猛烈なものと心得て居た私は、その男のあまりもの柔らかなので齋藤君の言葉を信じ得なかつた。今でも信じられない。いづれにしても若し果してその男が齋藤君の言ふ通りであつたとしたならば、高利貸も齋藤君に對しては、ラムの書いて居る某といふ借金家に對すると同樣、資金の調達者に過ぎなかつたらうと察しられる。

私が齋藤君を知つたのは、明治三十年の秋一葉女史の病氣が、最早絕望の域に達して居るといふ時であつた。私は當時本鄕臺町の下宿の地下室のやうになつて居る、梯子段を下つて入る室に居たのであつた。音に聞いて居た齋藤綠雨君はある夜突然にその痩軀をこの地下室のやうな一室に現はし、一葉女史のまた起つ事の出來ないよしを私に傳へ、その善後の事について相談を求められたのであつた。秋のさびしさ、夜の靜かさ、地下室らしい陰氣さ、相談の事柄の悲しさ、そしてそれを話す事のいさかか氣味の惡さ、それ等が一緒になつて一種ものすごいほごの空氣を作り出した。しかしこの初對面の齋藤君は、皮肉家でも、諷刺家でも、無論冷酷、不人情な人でもなかつた。いささか不氣味に感じられた始めの感は直ちに消え去つて、むしろしんみりした氣分になり、世にも珍らしい篤い心の情愛の人よと君を思ふに至つた。以來交遊は極めて短かかつたが、齋藤君は遂に私の生涯から忘れる事の出來ない人となつた。私はごうしても齋藤君をきらふ事は出來ないのである。

私はまたラムがすきだ、大すきだ。カアライルとかラスキンとかいふ豪い大家のすきな人は、天下決してその數の乏しいのを憂ふる要はあるまい。ただ私にはラムをイギリス文人中の最もなつかしい人として、永く愛さしてもらふ事を私は切に希望する。

發賣禁止の文藝

ユウゴォの著作の全部に對してフラマンと云ふ畫家が挿畫を描いて居るのを、一冊に纒めたものがあつたので、それを一枚一枚撥つて見て行くと、その內からだんだんに變なのが出て來る、繪畫に秩序紊亂といふのは少いやうであるが、風俗壞亂的のもの、恐怖を起させるもの、今日吾が警保局であるか警視廳であるか、そのいづれかから見れば、當然發賣若くは出版を禁止さるべきものが少なからずある。蓋しユウゴォは愛國悲歌の士である、健全なる文學者である、その愛國的の處、その健全なる處が、純粹の藝術的精神と相ひ容れないで、往々斯道の人からその作が排斥されて居るのである。然るに其挿畫に依つて見ると、そんな眞面目なそんな堅苦しい人の作に於ても、吾が當路の眼から見れば如何はしいとされるもの、世間に流布すべからずと認めらるべきものが、澤山にあるのだと云ふ事を證明して居る事になる。素より挿畫と著者の考へとは全然一致するといふわけでもないが、甚しく懸隔する筈はないのであるから、かく論斷しても少しも差支ないと思ふ。自分はここに於て甚だ迷はざるを得ぬのである。斯道の人から排斥されるほど健全なものが、當路の人から見れば禁止すべき

ものだとすると、兎に角精を勵まして立派な作物を出したいと考へて居る人達は、如何したら良いのであらうか。

「ボヴァリ夫人」の飜譯は出版を禁止された、「女の一生」も同樣である。嘗てはモリエルさへも禁止された。當路の役人はそれを禁止したが、役人ならずとも吾が普通の人が見たならば、なるほどこれは怪しからぬものだと云ふかも知れぬ、普通の人がさう考へて居るものならば、當路の役人がこれを禁止するのは當然であると云ふ事になるかも知れぬ。而もその世間普通の人なり、當路の役人なりは、大抵西洋の事と來ると無暗に感心する人である、少くとも文藝以外の事に就ては西洋を模倣して居る人である。これは決して無鐵砲な大膽な斷言ではない、恐らくその人は洋食を喰ひ、洋服を着、電車に乘り、若くは自動車に乘る人に相違ないのである。自分はここにも不可解な事に逢着した。他の事は何事でも西洋に感心してしまつて、文藝の一事になるとこれを排斥しやうといふのは何の事であらう。甚だ惑はざるを得ない。

西洋の惡德文學に對する禁令なるものは如何なるものか自分は知らぬ。聞く處に依ると相當に嚴格であると云ふ。併し察する處それは文藝的價値のない只徒らに挑發的な下等な書物に對して行はれるのではあるまいか。フランスの如きは極めてその邊の手が緩いやうであるが、イギリスでは例の通り

少くとも表面は頗る嚴しいと云ふ事が察しられる。これも恐らく官憲の考へは民意を代表して居るので、その嚴しいのは、やがて人民の考へが或は僞善的かも知らぬが、嚴しいからであらう。併し自分はその邊の消息に就ては門外漢であるから何も說かぬとして、さて吾が日本で今日公にされて居る飜譯物は、大抵は英譯から取つたものである。して見るとイギリスでは立派に流布されて居るものでも、日本では禁止して居るといふ事になる。法令禁令の如何は自分の知らぬ處であるが、事實はあの嚴格なイギリスで許されて居るものが、日本では禁止されて居るといふ事になる、而も如何はしい文學的價値の全くないものにして、大手を振つて通つて居るのを見るのはいよいよ不思議な事である。更らにこんな事は云ふべき事でないかも知らぬが、高位高官の人が實際にやつて居る事は何事でも許されて居るに、文學的の作物が禁止されると云ふのは、官憲が文藝を了解しないのか、それとも故意にそれに壓迫を加へるのだと云はれても仕方はないではないか。

今かりに吾が官憲の眼を以て見た標準に依り、古今の文藝からその當然禁止すべき要素を拔き去つて見たらどんなものであらう、その殘る處は如何なものになるであらう。デカロメンやオヴィッドのアルス・アマトリヤのなくなるのは勿論の事であるが、果してホオマアでも殘るであらうか、第一勞頭のアキリスの憤激はまるで子供の駄駄を揑ねたやうな下らないものだと所謂識者の貶斥に遇ふのは

よいとして、あのトロイ城を七廻りするヘクトルとアキリスとの太刀合から後の事は、殘酷なものだと直ちに發賣を禁止される事受合である。若しそんな事にならないとすると、それはその表面の殘酷な趣をすら解する事が出來ぬからだと見なければならない。その他ソフオクレスの古劇の如きもみな禁止して仕まはなければならない。現に今筆を執つて居る二三日前にも某處でエヂプスを演じて貴婦人の排斥を受けたといふ話さへある。若しこの飜譯が出て官憲のそれを禁止しないやうな事があれば、それもまた上記の通りその表面の意味さへ解らないからであるに相違ない。峻烈を極めた絕世の大作ダンテの神曲とても同樣である。失樂園にはそんな恐れはあるまいが、ミルトンの作には別の意味から禁止さるべきものがある。シェイクスピアに至つては隨分甚しい。大體のセンチメントに於てもさうであるが、その全篇に散在して面白からぬ句は多數ある。若し今日シェイクスピアが日本に居て、その作を新聞雜誌に出して居たならば禁止の厄にあふに相違ない。その飜譯が幸にして今日まで無事で居るのは、蓋しシェイクスピアの名に壓せられての事ではなからうか、現にモリエルの同じ厄に遇つたのを見ても、必らずしも沙翁とて安心はならぬと言へやう。

ラテン文學は大摑みに云つて文學の生氣を失つたものとされて居る、從つてラテン文學の內に發賣禁止の厄に遇ふものは、上記のオヴィッドを外にしてはあまりあるまい。それに緣の近いイギリス、

オオガスタン時代の文學も同樣無事であると云へやう。併し一たび十九世紀の敷居を跨ぐや、ここに文學は一段の生氣を加へると共に、バイロンとかシエレエとかに依つて代表される逸物がある。これ等はよし風俗壞亂の禁令に觸れぬまでも、治安妨害、秩序紊亂に問はれるものは少くあるまい。幸か不幸かこの狂瀾時代以後のイギリス文學は風俗壞亂的のものもなければ秩序を紊亂するものもない。只その代りそれ以後のイギリス文學には生氣がない、大陸のそれに比して遙かに遜色がある。たまたまショウの如き人があれば、今日極力非戰論を稱へて居る。若しこれが日本であつたならば、この人は一も二もなく國賊と云はれるであらう。そしてその作物の禁止される事は勿論である。事實ショウの芝居は大抵差し止められるべきものである。ショウ一人舞臺であるやうな觀あるに徵しても、今日のイギリス文學が如何に生氣を失つたものであるかは解ると共に、文藝から吾が官憲の標準を以てした發賣禁止の要素を除外したものの、價値のない事は了知されるのである。

ただここに横道に入る事ながら一言したい事がある。それは今日のイギリス文學に危險思想の少い事である。これは凡て人民に言論の自由が許してあるからではあるまいか。たとへばロシヤのやうな國であるから、トルストイのやうなものも出れば、クロポトキンのやうなのも出る。されば現にトルストイもその作をイギリスで出版した事もあるし、クロポトキンも逐はれてイギリスに居た。イギリ

スは實際に於ても自由の國である、思想に於ても自由の國である。それ故に却つて今日立派な文學が出ないとも云へやうか。自由を得んとして戰つて居た時代には文學にも活氣があり、歐洲文藝の中心であるの觀があつたが、泰平を貪つた此頃は文學上の生氣を失つて來た。この問題に就てはいろいろなる方面から見なければならぬので、今ここに簡單に說き去る事は出來ないのであるが、イギリスの例から見ても發賣禁止と云ふ事が所謂官憲の目的を達する所以でない事が知れやう、何となればさう云ふ點に於てもつと自由であつた方が、危險思想なり秩序紊亂なりを防ぐ所以であるからである。

自分は古今の大文學はみな發賣禁止的要素を抱有して居ると云つた。なほラテン文學や今日の英文學には生氣がなく、大文學がないので、從つて發賣禁止的の要素がないと云ふやうな意をものべた。而もその古今の大文學にして若し飜譯されてなほ且つ發賣禁止の厄に遇はなければ、それは當路の人に表面の事實さへも了解する事が出來ぬのだとも云つた。蓋し吾が官憲は如何なる危險な思想でも、また風俗を害するものでも、これを蔽ふに何物かを以てすれば可いとして居るかのやうである。なるほど某貴族議員の警句である、オブラアトに包めば可いと云つた趣がある。この點に就ては自分も異議はない、而も危險思想でも何でも劇樂は宜しくこれをオブラアトに包むべしといふ考へを自分は抱いて居る。またさうするのが當然だと思ふ。併しこれは孰れの場合にもさうすべきとは言はれない。

時にはこれを包む事の不可能な事もある。手近の例を擧げれば「女の一生」の中にある一節の如きは正しくそれである。アナトオル・フランスの「赤百合」の場合もさうであると思ふ。恐らく官憲はこの露はなのが、一般低級な讀者の心を害ふのを恐れて居るのであらう、それは素より諒とすべきではあるが、要するにそれは以前に裸體畫に布をかけたと同樣無用な事ではあるまいか。

かく考へて來ると自分は官憲の處置よりも、さらに進んで世間の所謂識者なるものの考に思を致さざるを得なくなる。自分はよく人人の口から健全な文學と云ふ事を聞く、光明のある小說といふ事を耳にする、雄大な文學といふ事はよく人の言ふ處である。なるほど昔の文學にはそんなのもあつた。日本で云へば馬琴の小說のやうなの、イギリスで云へばトム・ジョオンスのやうなのは、この所謂識者の求めるものに適當したものかも知れない。併し今は時代が變つた、そんな手ぬるいもので滿足の出來る時代ではない。今日識者の云ふやうな批難は外科醫に向つて、血の出ないやうな手術は出來ないかといふやうなものである。テキパキと療治をするには手術を要する、手術をするにはごうしたつて血は出る。血はいくら出たとてその病が治れば良いのではないか。今日の文學は外科手術である。社會の缺陷にメスを加へる、殘酷にも見へる、血は無論出る、併しそれが則ち人生の急所を突いた所以である。昔のお醫者樣は只脈を取るばかりであつた、膏藥を貼つたり、煎藥をのましたりして居た、

そして隨分だらだらと病人を引つ張つて居た。それが馬琴の小說である。さうだ、昔でも隨分外科醫は居た、西鶴などはそれだ、併しその西鶴は今日でも發賣禁止の札つきであるのは是非ない事である。

雄大と云ふ事を矢鱈に云ふのは素人の事であるが、一體雄大といふのは如何な事なのであらうか。シルレルは全市を火災の內において悲劇を見せたが、シエイクスピアは一篇の手巾で、より以上の悲劇を作り出して居るとは、コオリツヂの評論で嘗て讀んだ事であるが、前者はワレンスタインの事であらうか、後者は云ふまでもなくオセロの事である。この場合兩者孰れが雄大なのであらうか。ワアヅワアスの野花の歌に嘗て自分は雄大の趣があると感じた事があつたが、雄大とは事柄の大きさを云ふのではあるまい、斷じてさうではない、作者の心意と材料の扱ひ方にあるのであらう。果してさうとすると、さう容易に雄大であるとかないとか、判じ去る事は出來まいと思ふ。併しこれは勿論の事として、さて事實の雄大なのもまた結構である。荒海や佐渡に橫たふ銀河などはその形の上から云つても雄大で面白い、自分はその形に於て雄大なものを求めて見た事もあつた。そしてそれには最も大きな戰爭が良い材料だと考へた事があつた。戰爭と云へば生死を賭してかからなければならぬのは勿論の事であるが、戰爭を生かして雄大な文學となし得るほどな文人が、戰場に出入すると云ふのは先づ稀有の事と云はなければならぬし、第一そんな事は當路から容許されないと見なければならない。

自分は日露戰爭に於ける旅順の戰などは、親しくこれに接して見たならば、立派な近世のエピックを作すに足るものであらうと思つた。よしやヘクトルとアキリスといふやうな總大將の太刀合せはないにしても、同種類の一騎打ちはあらうし、ヘクトルの子別れのやうな愁歎な場もあるであらう、而も近世的器械の進歩に依つたいろいろな慘事や悲劇が、盡くその内に抱藏されて一大叙事詩の構成される事は疑ない事であらうと考へられる。これは旅順の事ばかりではない。今日の歐洲戰爭にも適用出來る事で、その間から不朽の事跡を發見する事は難くない事であらう。自分は戰爭を以て文學的でないとして材料の外に遺棄するわけには行かぬと考へる。併しこれは實狀を知らぬ想像では出來ない事である。必らずその生死の巷に出入すべきである。が、さてそんな志あるものが假りにあつたとして官憲は一個人にそれを許可するであらうか、また許可した處でその見聞の通りを筆にさしてくれるであらうか。これを筆にした場合、少しく思想が俗調を脱すると、國賊とか、非國民とか言はれる事はあるまいか、自分の國の戰爭を傍觀して居たゲエテは何とも云はれぬが、フィヒテは劍を案じて立つたと云つて賞められて居るのでもその邊の消息は知れやう。現に旅順の包圍戰に就て最も無遠慮に批判をした人は文部省から甚しく避忌されて居るといふではないか。雄大とか高遠とかを、口にするのは容易であるが、さて萬一それを實際に示す人が出て來れば、官憲も人民も共に驚いて、それに壓迫

を加へる事目に見るやうである。耶蘇基督などと大層な事を言ひながら、それが今日再び出現したならば、耶蘇教徒も人民も擧つてこれを殺さずには置くまい、文藝界にも宗教界にも壓迫は同一である。

吾吾の恐れるのは一知半解の所謂識者と稱する人である。殊にその人人にして富者であり、文藝に多少の趣味を有して、これが保護でもしやうと云ふやうな事があればそれこそ最も厄介なものである。温和な專制家が酷烈なそれよりも害があると同じく、この種の保護者は却つて文學を滅すものである。今や富豪の人にして藝術を愛玩する人は少くないやうである。それ等の人は暇と金とに任せて、碧巖の提唱を聞き、光琳の畫に萬金を投ずる人である。その禪が野狐禪に終るはまだしも、たまたまそれが交遊の手段となり、その趣味が贋物を攫むに終らなければ幸であるが、それは吾吾に緣のない事として、さてこれ等の人の趣味が一轉して現代の文藝を保護すると云ふやうになつては一大事である。恐らくこれ等の文藝を害ふのは、かの温和なる專制家と等しく、官憲の發賣禁止以上に及ぶ事と豫期しなければならぬ。フランスにはブルジョアと名づくる一階級の民がある。金があり一見最も道理らしい道理觀を持ち、市民として誠に立派なものたるを失はぬやうではあるが、要するに唾棄すべき俗人である。イギリスにもフィリスティンと名のついた人人が居る、カアライルに云はせれば、むしろ國民擧つてフィリスティンかも知れぬ。吾が社會には幸にまだそんなものはないと思ふが、時日を經

るに從つてそんな徒が出ぬとも限らぬ。吾吾は最もこれを警戒すべきである。斯樣な事は本文の主旨と關係がないやうに思はれるが、官憲の禁止令も實はかかる低級の人人を眼中に置いて居るから起つたのであるとすれば、かかる輩を警戒するのは無益な事ではあるまいと思ふ。要するに古今東西を問はず苟も文藝と稱して長い生命を保つて居るものの内には、みな發賣禁止的の要素は入つて居る事を自分は斷言して憚らない。

世人或は云ふであらう。さう云ふ要素なくても文藝は出來さうなものだと。これに對して自分は然りと云ふ、而もかくの如き文藝は精進料理の如く、また脂肪のぬけた鰯の如くであると添えて云ひたいのである。

他界の大杉君に送る書

大杉君、私が貴下と室を同くして言葉を交へたのは確か只一度であつたと記憶します。只一度でありはしましたが、貴下の個性は深い印象を私の腦裏に刻みつけました。そして何かにつけて貴下の事が考へ出されてなりませんでした。貴下には警官も感服して居ました、私はそれを二三の方面の警官達から直接に聞かされて居ました。婦人にもて、警官にも感心された貴下は隨分幸福な人だなと、私は密かに羨ましく思つて居ました。私はそれから物好きの本性をあらはして、貴下と私の親しくして居る友人の家で偶然に邂逅して、その席へ隨行の刑事の人をも招いて、貴下にいろいろな事を伺つて見たいと切に願つて居ました。しかし此れは出來ない相談です、貴下が私の友人の許へ度度來られたとして、私は滅多に人を訪問する事のない方ですから、それが約束でもしての事ならばですが、偶然に落合はうと言ふのでは、先づ有りうべからざる事です。が、絶無とも言はれないのですから、私は密かにそんな折のある事を樂しみにして居ました。そして貴下に奇問を呈して、その時の貴下がどんな顏をするかを想像したりして、獨りで面白がつて居たのでした。素よりそんな事は世の公事に關

する次第ではありません。全く私の好事癖ディレッタントの惡戯に過ぎません。併し私一個には可なり興味のある事であつたのです。ですがそれはもう絶對に出來なくなつたので、何だか惜しい事をしたやうに思はれてなりません。

重ねて言ひますが、貴下はごうも幸運な方です。兵隊に殺されたと言へば不幸のやうですが、あれが一段貴下の名を高くしたではありませんか。氣の毒な甘粕とかいふ人、否、陸軍のおかげで貴方は殉教者のやうなものになつたではありませんか。その上これは貴下のためではない、地震のお蔭ですが、世間は餘程社會主義の說いて居る政治に近くなつて來て居るではありませんか。世間は社會主義といふ名稱を恐れながら、その實に就いては隨喜して居ます、隨分變なものですネ。もつとも貴下は社會主義者ではなくて、無政府主義者なのださうですネ。私には主義なんて事は皆目解りませんが、この二つの主義は全く反對なもののやうに心得て居ます。然るに世間では主義者とか一口に言ひ棄てて、兩者を同じものにして居るやうではありませんか。ただ兩主義に屬する方方のやり方もよく似て居るので、私の如きものには些か區別がつけかねはしますが。まアそんな事は兎に角として、貴下は幸福な人であつたと思ひます。甚だ失禮な言ひ方ですが、貴下は殺された方が餘程得てあつたと思ひます。

それにつけてもお氣の毒なのは貴下の甥御の事です。その御兩親の事です。ごうもあれは初めから殺害する考であつたと外思はれません、素人考から言へば。何故かなれば最初貴下が子供だけは歸してと頼まれた時、甘粕といふ人は承知しなかつたさうではありませんか。貴下方を殺害後、普通の殺人の場合のやうに、證據湮滅に骨を折つて居る處を見ると、始めから子供もなきものにしなければならないと云ふ考で、同伴を强いたのではありませんか。それでなければ足手纏の子供を一緒に連れて行く筈はないのです。併し私共素人の――普通人の――考から言へばさうですが、或は陸軍の軍人といふ特別な豪い考をもつた人の頭では、さうは考へられなかつたのかも知れません。陸軍は教育でも裁判でも別になつて居ますから、或は病氣も別なのではないかとさへ察しられます、特別に陸軍の病院、海軍の病院と云ふのが、ある狹い町に對立してあるのを以て見ますと。まア全くその邊の事になると私共の見當はつけかねます。が、いづれにしても少年は可哀さうな事をしました。若し私の子にあんな事があつたら、私は化けて出て陸軍を取り殺します。天拜山の菅丞相のやうに雷となつて、「梨壺、梅壺」さては「紫震殿、弘徽殿」ではない、三宅坂邊に火焰となつて狂ひ廻つて見せます。それにしても甘粕と云ふ人は隨分卑怯な人ですネ、始めは如何にも男らしいやうに見せかけて居ましたが、今となつてはそんな命令は出さなかつたと頑張つて居るさうです。萬一命令は出さなかつたとしても、

その責任は負つたら良ささうなものではありませんか。田夫野人の場合でもさうするのが當然です。その上あの人は、他人の子をつかまへて、誰れか貰ひ人はないかと尋ねたとか云ふ事ですが、戯談じやない、犬や猫の子じやあるまいし、やり場に困ると云つて、他人の子をそんなに簡單に片付けられてたまるものですか。この一言を以ても——果して左樣言つたとすれば——無きものにする意のあつた事は、確かではありませんか。それを今更ら知らぬなぞ云ふ態度と比べると、あれでは原さんを刺した艮一とかいふ少年の方が餘程男らしいではありませんか。もつとも事があんな複雜に縺れて來ると、いろいろなボロも出ますし。樣樣な情狀も察して見なければなりますまい。落着いて考へて見れば、あの大尉も實に氣の毒な人です。いづれ上長の人からの指圖でもあつたのでせう。私は貴下の甥御を氣の毒に思ひますが、あの大尉もそれに次で氣の毒だと思ひます。さうです、出來るならば、減刑になるやうにして上げたいと思ひます。恐らく貴下もあんな一軍人の行爲を根にもつやうなケチな人ではありますまい。ごうも變な教育、間違つた考がすべての煩を爲すものです。

併し私は貴下の事から、さらに不幸な人が出來た事を悲しみます。それは下級の憲兵諸氏です、この人人こそ實に天を仰いでも地に伏しても、右を見ても左を見ても、浮ばれない人人です。上官にはそれぞれ味方があります。肩をもつ人があります。位置が上になるだけその便宜がありませう。國家

のためにしたのだとか、立派な人物であるとか、人格があるとか、さも事事しく囃し立てられます。後になつてはそんな事は三文の値もない事ではありますが、兎に角人氣にはなります。獨り兵士諸氏に至つては、模範兵であつたとか、何とか、水死の女をつかまへて美人だと云つた風の、通り一片の御座なりか何かで片付けられて居ます。考へても解らうではありませんか、だれが可愛らしい少年を、すき好んで殺す奴があるものですか。或る家へ入つた泥坊が、衣類を盗み出したが、子供のだけは置いて行つたといふ話を聞いた事があります。或は子供の着物は値にならないからであつたかも知れませんが、まアそれが人情です、ごんな惡黨でも子供には勝てません。それを模範兵たる諸氏が何んて好んで殺す筈があるものですか。そんな事は素より問題とするに足りません、陸軍は萬事普通人と考を異にするのだといふ規定でもない以上は。私は兵士諸君が少年を殺害する時の事を想つて見ては戰慄します、時時はそれが爲めに惡夢に襲はれます。少年を殺す事の殘虐なるは言ふまでもありませんが、さらにそれを殺すに至らしめたものの殘虐なるは一段と甚しいと思ひます。私の惡夢に襲はれるのは少年のためではありません。兵士諸君のためです。その時の兵士諸君の心持がごんなであつたらうと想像してです。心を鬼にしてとはよく聞く處ですが、あの場合こそほんとに心を鬼にしたものでせう。その心持を想像して見て、何とも言へない心持になり、それが私の夢の世界までつづいて來る

のです。時があんな騒がしい折で、人の心が顚倒して居た時でしたから、それでも幾分かはその恐ろしい氣分も紛らはされはしたでせうが、決して普通の心では出來なかつたでせう。而も自分達としてさうさせる何者かの壓迫があつたのでせう。ふとそんな事を考へて枕につくと、私はその惡夢に襲はれるのです。燒跡の廢墟のやうな荒凉たる處を、私の心はわけもなく只かけ廻るのです。が、兵士諸君はこれ程の苦しい事をして、さてその上は恩賞にでも與る事かと思ふと、これは又意外にも重き罪科に問はれ下獄の身となつたのです。ごうも浮ぶ瀨がないではありませんか。而も世間からは何とも言はれません。勿論あまり賞めて貰へません。一體ごうしたら良いのでせう。

其處で私は貴下にこの書面を差上げて御願をするのです。前にも度度申す通り、貴下は幸福な人です。御自身ではごう御考か知りませんが、私は固くさうだと思つて居ます。少くとも時代の寵兒でした。その上この度の事で、後後までも永く記憶される事と思ひます。時代の寵兒であり幸福な人である貴下が、一つあの貴下の事から不慮の不幸に陷つた兵士諸君のために命乞をして下さる事を、私は貴下に御願するのです。大尉に對しても同樣な事を望むのですが、これにはそれぞれ相當な連中があつて、後援をして居ります、その上いづれ豪い某博士とか、國士とか云つたやうな人が出て來て、大尉の豪い人である事を遺憾なく說いてくれる事と思ひますから、大して心配は要らないと考へます。

只兵士諸君の事に至つては甚だ心細い次第ですから、特に貴下を御煩はしするのです。

これも甚だ失禮な臆斷ですが、ごうも貴下は極樂におゐでの方とも思はれません、多分地獄におゐでの事と存じます。もつとも天の判斷は解りませんから、或は極樂に居られるのかも知れませんが、極樂なんか貴下はお嫌ひと察します。よし極樂へ送つてやると言はれても、貴下には御免を蒙られる方かと存じますから、先づ地獄の方と極めてかかるのですが、人を殺した連中もごうも極樂へ行けるとは思へません。さうなると第一あの連中が困るだらうと思ひます。婆婆でもさうでしたが、地獄では勿論貴下の方が上位にあるだらうではありませんか。その上位の貴下の前に連中が出て行くのは甚だ不面目な事でもありませう。婆婆だから軍人で御座いで、世間とは別の取扱ひで——中世紀の僧侶のやうに——威張つて通つても行けますが、地獄へ行つてはさうは行きますまい。其處で私の御願といふ事になるのですが、それは恁うなのです。一つ貴下からお閻魔樣に願つていただいて、その兵士諸君の減刑をして頂きたいのです、なるべくなら兵士諸君は、無罪にして上げて貰ひたいのです。婆婆の事を地獄の神樣に賴んだつて駄目だと仰有るかも知れませんが、お閻魔樣は地獄の神樣と云ふよりも、裁判の神樣だと聞いて居ますから、この御願はさう見當違とも思はれません。よしお閻魔樣が何であるにしても、他界の一大勢力であるには相違ありませんから、これ位の事は何とかならうでは

ありませんか。併し他界の王であるから、他界の事は自由になるが、婆婆の事はごうもなるまいと仰有るならば、それは是非もありません。それでも娑婆のものの祈願に依つて他界の蠅の浮ばれる例もあると聞て居ますから、他界からも骨折つていただいたら、婆婆の事も動かされない筈はないと思ひます。私はごうも兵士諸君が氣の毒でなりませんから、是非この事を御願ひ致すのです。

又甘粕といふ人の事もです、なるべくは貴下の居られる處へ行つて、不面目な目に遇はないやうにさして上げたいと思ひます。ごうか一つ御考を願ひます。初めにも一寸申しましたが、嘗て警視廳に檢擧された所謂主義者の多數が喧騒を極めて、警官も困りぬいた時、貴下が來て一言で、一同を靜粛にさしたと、さる警官が貴下に敬服してさう言つた事もありましたが、ごうかその呼吸で地獄でも一つ腕をふるつて下さいませんか。それと云ふのも貴下が時代の寵兒であり、無政府主義とか云ふのが何だか私には解りませんが、時代が貴下の考へて居るやうにだんだんなつて行くにつけても、その間の犧牲になつたこんな不幸な人を助けて上げたいと私は切に念ずる次第ですし、またするのが人道の上から見ても、貴下方の主旨であるとも考へられるのです。貴下のなくなられた事は如何にも世の損失かも知れません、併し死んでも生きて居る以上の働きは出來ませう。正しく陸軍には殆んど致命的な痛手を與へました。又貴下一身の事に至つては、私は飽まで祝着申上げます。若し大杉榮虐殺祝賀

會と云ふやうなものでもあるならば、私は喜んで參加するでせう。

野枝さんの事はいろいろ承はつては居ますが、御目にかかつた事もありませんから、別に何とも申上げません、宜しく御傳聲を願ひます。隨分夫禮な事を申上げたやうですが、少しも惡意あつての事ではありませんから、お許し下さい。

精進行

エマはお父さん携帶で來たと上級生のAが言つた。エマとは私の娘の名であるが、私はさう言はれる位この旅行では脇役である。あまり東京を踏み出した事のない私が、中央線の大月驛なんて、トンネルの十數箇もくぐつて行く處まで出かけるのが既に不思議であるに、それから犬でも輸送する箱と外思はれないやうな電車の中へ入れられて、三時間近くも走り吉田口まで達したのは、實に末曾有な事である。が、これ迄は坦坦たる普通な旅程で、何も別に言ふに足る事はないのである。離路は此れから先きにあるのだから、この旅行が私には年代記ものになるのである。吉田口から電車よりは一層見すぼらしい鐵道馬車に乘せられ、といふよりも、荷物と一所に御者臺に積み込まれた。馬はのそのそと車道を辿つて行く。御者が居なくても、獨りで歩いて行く。近頃平田禿木君の譯になつたディヴィッド・カッパフィルドにも馬が勝手に歩いて行く驛馬車の事が書いてあつたが、先づ私達は此處で十九世紀の初めに立ち戻つた姿だ。それでも歩かせられるのよりはマシと思つて、小さいスウト・ケイスを大事にかかへて衝立つたまま引かれて行く。忽ち馬車は脫線する。降ろされる。困つたなと思ふ

と、脫線も早いが回復も早い。二三人お客が降りると、御者が、そのお客相手にヨイコラサとやると、車は忽ちもとの通り線の上にのる。こんな風で一里ほどの道を來て、さて此處が河口湖への道だと云つて降ろされたのは何でも畠の眞中のやうな處だ。どうしたつて言ふんだ。どつちへ行つたら宜いんだか、見當がつかない、こんな處に湖水なんぞ有りさうにもない。御者にきくと、眞直に行つて左へ曲つて右に折れて、又左へ行つて、どうとかすると、何とやらがあるから、其處からどうとかしろ、と言ふのだ。どうするんだか覺えられはしない。仕方がないから、宜い加減に行つて見ると、百姓家の背戸のやうな處に出てしまつた。まあ其處を失敬して通りぬけ、路次のやうな處をうろうろした揚句、それでも往來らしい處に出た。例のケイスをよちよちかかへて、二三度訊いてやうやく湖畔に達した。此處まで來るとなるほど東京からのお客樣らしいのが大分見える。案內書に依ると、此處から乘合の船が出るのださうだが、見渡した處そんなものは出さうにもない。もう晝だから一休みして、それから和船を艤して出かける。

河口湖は富士五湖の內にも一番手近にある。從つてその湖邊は相當に開けて居て、旅館もあり、西洋式のホテルもある。素より風景も甚だ佳い。併しまだ甚だ人間臭い、都會臭い。決して山間の湖水といふ感は多く得られない。只この湖水の面をギッチラコ、ギッチラコとやつて行くのは、如何にも悠

長で時代ばなれがして居て宜い。船頭は此處のものだが、東京に出て居て、夏だけ歸つて來るのだと、口を切つて東京の話を始め、私の住んで居る大久保の事なぞをも知つて居り、某といふ有名な人も彼處に居ますがなぞ、私の知つて居る人の噂さへも出し、やがてこの湖畔の名所を說明してくれる。向ふに見えるのが宮樣の御別莊で、此方のが某とかいふ政友會の人の別莊、それが大倉さんのですと一番良ささうな家を指す。なるほど良い位置に、良い別莊をかまへたものだ。何でも人は惡い事をしなければいけない。惡い事をしてお金を人から捲き上げなくてはいけない。さうすると期ういふ處に、別莊も建てられれば、華族にもなれて人から尊まれる。ごんな不行儀をしても人から讃められる。よくよく心懸けて惡い事をするものだよ、と暇にまかせて子供に言つて聽かす。他家の子にそんな事を言つて聽かしては、正直な行をして人から惡く言はれる事を好むやうな特志の父兄が、異議を言はれるかも知れないが、なに自分の子だから、眞實の事を言つて敎へても差閊へはあるまい。船頭はやがて右手に見える島を指して、あれが攝政の宮樣のお休みになつて、御中食を遊ばされた島だといふ。向ふから見てはどうか知らないが、水上から仰げば頗る風致のある島だ。私達は竹生島參詣と云つたやうな氣分になつた。「處は波の上、國は近江の江に近き、山山の春なれや」と云つた氣分。船頭はまた左の方を指して、彼處に赤松が並んで立つて居ます、あれが敷島の松と云つて、煙草の敷島の包み

に出て居る松はあれを取つたものです。もう少し行つて横に見ると宛然(まるで)それですといふ。なるほどさう言へばさう見えない事もないが、そんな事はどうでもよい。唯その風景は決して惡くはない。船頭はまだまだいろいろな博識を示した。が風景も見飽きて、退屈であるし、凉しいとは言へ、日に照らされて頭も痛み出し、少し苦しくもあるに、まだ中中彼岸には達しない。それでもギツチラコ、ギツチラコと一時間半も漕いで、やうやく向ふ側に到着する。船を出ると其處から十二三町の山越をするやうになつて居るのだが、この荷物をもつて山越は少し困る。が、人夫なぞは影も形も見えない。一寸用を達してくれさうな人すら見當らない。思案にくれて居ると、偶然側から小學校の生徒とでも言つたやうなのが三人連れで出て來た。これは幸と、この荷物を西湖まで持つて一緒に來てくれないか、お禮はするからと云ふと、子供達は一言も口をきかないで、只にやにやしながら荷物を受取つて跟(つ)いて來てくれる。凡そ七八町も山道を登ると、その先きがトンネルになつて居る。そのトンネルのびしよびしよした中を二町程も行つて、その他端の口に出ると、其處が第二の湖水西湖の畔である。此處で子供達から荷物を受け取り少許の銀貨を渡し、それで宜からうかと訊いたが、先方は不相變口を利かない。只前のやうににやにや笑つて、それを受取り、すたこら勢よく歸つて行つた。終始一言も口をきかないのであるが、要領は頗るよく得て居る。

此處が西湖の畔と云つたが、驚いた事には家は只一軒あるばかり、人と云つては幸ひその渡船場に青年が只一人居たのみ。水面の高さは河口湖より五十丈も高いとか、幽邃といふよりも、むしろ荒凉としてもの凄く、なるほど深山中の湖水に來たと云ふ感になる。見渡した限り家などはない。渡船場の青年はすぐにボオトを支度して私達を乘せてくれた。對岸は一帶に只鎔岩の岸壁をなして居り、左右は森林をなした嶮峻な山である。蓋し對岸と左右とは、水を距てて水成岩と火成岩と岩質を異にして居るのである。水は平らに浪立たず、周圍の林は靜かに、全く森閑たる趣。聞えるものは、ただボオトを進める櫂の單調な音のみ。その內先方から二三人の客をのせた船がやつて來る。それが接近すると此方と先方と兩方の船手の間に相談が始まつた。取りかへようかと此方が言へば、先方も宜からうといふ。物品の交換である。談判は一瞬の間にまとまつて、さて取引となつたが、その物品たるや雙方のお客なのだから驚く。私達は爰に物品となつて、他の船に讓り渡された。船頭としてはこれは至つて便利な事だが、お客樣は好い面の皮だ。それは兎に角、この西湖の方は小さくはあるし、ボオトではあり、かたがた四十分を出ずして、彼岸に着いた。其處は人家も多少はあり、人間の住む處と受取れた。がさて此れからを如何したら好いのだらう。案內書きには、此處から馬車で一里とか樹間の道を行つて、精進湖畔に達するのだとあるが、馬車なんかありはしない。兎に角茶屋に休んで待つ

て居る事にする。がいくら待つても馬車は來ない。來た處で聞き及んで居るやうな乘合の簡單なものではないらしい。自動車の別仕立に至つては、さらに多額の金を要する。もう既に船の別仕立で汽車賃の何倍かを支拂つて居る。この上多額の支拂は少し馬鹿馬鹿しい。と云つて此處にかうして止まつて居るわけにも行かない。待つ事もう四十分位になるが、まだ中ぶらな狀態で居る。一體なんだつて自分はこんな處までやつて來たのだ。誰れに賴まれたのでもないに。併し恁うなつては引き返すわけには行かない。況んや自動車ならば幸に一臺あるのだから、兎も角もさうするより仕方はないと云ふので、まことにお粗末な自動車のお客になる。すると恐らく三十分も走つたかと思ふ頃、路傍の變な處で、それが止つて、此處が精進湖だから下りろと運轉手が言ふ。なるほど見下ろすと湖水があるが、人家らしいものは一軒もない。此處でどうすれば宜いんだと聞けば、村へ行くなら船に乘るのだと言はれる。いやはや又船かとウンザリする。又仕方がないから船にのる。何の事はない、仕方のない爲めに旅行をして居るやうなものだ。併しこん度の船は極めて簡單で心持が良い。空はすつかり曇り、少し霧雨をさへ降らし始めた。がその爲めか、湖上の趣は西湖のそれにも增して幽邃に、矢張人間臭い處は全くなく、私達は全く自然の懷に抱かれてしまつたやうに感じる。斯うなると來なければ宜かつたとも思へない。船は十五分もしてその村の岸に達するとすぐに上陸して私達は目指して來た家に

つく。新宿を朝の五時に出で、到着が午後の五時、汽車、電車、鐵道馬車、和船、ボオト、自動車、乘物づくしで十二時間とは少し驚かされる。目指して來た家には大勢のお嬢さん達が居て、劈頭に書いたやうな警句をその中のAが吐いた。K先生が指揮官格で、赤城、正宗の兩畵伯もすでに陣取つて居られた。

この精進湖畔には古くから精進ホテルといふのがある。最早二十年以上も昔にイギリス人が——箱根の小涌谷なる三河屋に居た男ださうで——此處でその業を開いたのださうであるが、これは村から反對の側の全く離隔されて居る湖中に突出した一角に建てられた孤獨の建物で、湖畔中最も景勝の地位を占めて居る。ホテルは湖の南岸にあるが、村は北岸にあつて從つて南に水面を受けて居る。村の戸數は八十、人口は六百といふから、一戸あたりが大勢になる。家は殆ごすべて蠶絲をまく枠の手製を業として居る。その枠は此處の木材で製したのに限るといふ程良好なものであるとか。それでその製作が僅かに此の村の生活を支へて行くのださうだ。湖畔には一二の旅館もあるが、此處まで來る人はたんとはない。從つて孰れもお客が無ささうに見受けられる。さすがにこんな僻地でも小學校と郵便局とはあつたが、警察署も役場も見當らなかつた。私は何處へ行つても先づ髯の處分をしなければならない、不幸な人間であるが、此處には床屋もないので閉口した。併しそれ程人間界を離れて居る

のだから難有い。湖畔にはカンピングの連中が、幾組もあつて、私達の到着した時、丁度それぞれ夕食の支度をして居た。中には金が來ないので、けふは一日芋を食つてすましたなんて、湖水に浴しながら、大きな聲をあげて居るのもあつた。

ごうも私としては不思議に安眠の出來ない一夜を過して、翌日は朝から富士の方面へ行かうといふのであつた。勿論登山するのではないにしても、それなら早くから出るべきを、八時近くになつてやうやく出發した。私は昨日の今日ではあるし、安眠もしなかつたので、如何かと多少の懸念はあつたものの、足だけは大丈夫と心得て居るので同行した。此處からは何處へ行くにも先づボオトで對岸まで出なければならないので、今も一行は二隻のボオイで湖水を渡り、家の主人を東道に富士への道を進んだ。道は極めて平坦で而も樹林の間を行くのであるから、この上もなく快い。東京市中の道よりも良い位だと云つたから、嘘をつけと言ふ人があるかも知れないが、風塵を飛ばされたり、泥濘に足を取られる市中の道よりも遙かに良い、殊にそれが樹蔭になつて居るに於てをやである。それで居て知らぬ間に、一歩一歩高處に向つて居るのであるから全く難有い。宿の主人に樅とかツガとかバラとか良く似よつた立木の區別その用途などを教はりながら行くと、程なく殊更ら深い密林の間に出た。これが卽ち有名な青木ヶ原で一に樹海といふ富士山麓北面一帶の樹林であるさうで、行けども行けど

も、それは涯を知らない。やがて私達は富士の風穴といふのに來た。風穴といふのは、以前から蠶種の事で聞いて居た處であるが、もつと峻嶮な山腹にでもあるのかと想像して居た。高く聳えた岩壁などに穴のあるのは、よく深い山に見る處であるから、富士の風穴なるものも、そんな處にあるものと心得て居た。殊にそれが蠶種を保存して置くのであるから、寒冷な處でなければならぬ點から、ごうしてもそんな高い懸崖にでもあると外思はれなかつたのである。處が今殆んど平地のやうな處を歩いて來て、此處が風穴へ入る處だと言はれ、何だか誑かされたやうな氣がした。宿の主人はこの風穴の預り主で、すべて此處の蠶種はこの主人の手を經て出し入れするのださうであるから、此處では甚だ重寶な人だ。主人の世話で、一同は靴にガンジキを括りつけてその風穴なるものに向ふ。穴は素より横に延びて居るのであるが、入り口は縱に下に降りるのである。さて斯うしてその入口まで行くと、さつと冷氣が身を襲ふ。岩につかまり岩を踏んで暗い地下に入つて行く處はごうしても地獄へ行くと外考へられない。その地下へ入る途中の岩の段落の附いた處に、太い蠟燭が置いてある。各自は火の點ぜられた一本を先進者から受取り、さらに自分は別の一本に火を點じて、それを後繼者に渡すのである。かくして各個一本づつ蠟燭を手にして中に入つて行くと、穴はずでに横になつて居ると共に、最早岩はすべて氷に包まれて居る。なるほどこれではガンジキがなくては滑つて歩けないに極つて居

る。否、それをつけてさへ動もすれば滑りさうである。先づ第一に見るものは、荒けづりの板で圍まれた小屋のやうなものであるが、これが則ち蠶種を保存してある處だといふ。この邊には上方から太いツララが下つて居る。直徑は四五寸もあらうか、もう其邊は冷氣ではなくて、寒氣である。而も嚴冬の寒氣である。吐く息は煙のやうになる。その内に天井を成して居る岩が低く垂れて、立つては歩かれなくなる。立つごころではない。身體を二つに曲げる程にしても、折折頭を上に打ちつける。大勢が揃つて身體を二つに曲げて進んで行く處はまるで子を取ろ子を取ろをやつて居るやうだ。こんな態度で進む事十間程すると、又廣い處に出る。するとその行き止りの處に、こん度はツララとは反對に氷柱が二三本立つて居る。これは上から落ちる點滴が四時たえず、それが氷つて成つたものだといふ。それでも夏向きは寒氣が幾分かゆるむので、その點滴のために氷柱の頂點から底まで一貫した穴が穿たれて居る。その穴へ見物人の誰れ彼の入れた名札がよく見える。主人はこれから先きはいよいよ狹く、僅かに身體を殆ど直線にねかして通じる位で、その先きが又廣くなつて居るが、これ以上は普通の人には行けないと說明してくれる。そしてこの通り風が奥の方から吹きつけて居ると云つて、その狹い口の處へ、蠟燭を向けて見せた。なるほど焔は此方へと傾いて消えさうになる。風穴とは恁ういふ處から來た名であらうか。私達は只感心して聞いて居た。が暫らく低徊して後また匍ふやうに

して出て來る。地獄と云へば火を聯想するが、これは氷の地獄と云へばその概念は得られよう。嘗て秋吉臺の鐘乳石の洞穴の事を書いた時にも、私はそれをダンテの地獄に比したが、今も同じ比較を說かざるを得ない。ダンテの地獄にも罰として氷に鎖された處があるが、佛書の方にも紅蓮大紅蓮の氷にとざされといふ言葉がある。氷の地獄とは恁ういふ處から想像されたものであらうか。何にせよ冷い恐ろしさである。かくして地上に出ると山中の可なり凉しい處であるに拘らずむつとしたその暑さを感得した。

富士へ登るにはこの精進の方面からするのが一番樂だといふ。なるほど今迄歩いたやうな道ならば、此程樂な事はない。殊に攝政の宮樣が先年お通りになつた跡といふので、道路は一際良くなつて居る。なんでも嶮岨な道は宮樣のお跡を行くに限ると思つた。私達は可なり道草を喰ひ、事實文字通り路傍の叢の內に折折熟して居る木苺を取つて味つた事もあるが、風穴を出てから一里ばかりして、富士の一合目といふに達した。この邊は落葉松の林で、四方の眺めも開けて、極めて明るい處である。此處で一同は用意の握りめしを喰ふ。大きな握り飯に小さな梅干の一つ入つたそれが此處での大事な晝飯である。時は正に十二時。

此處でお孃さん達は大抵へたばつてしまつた。隨分弱いお姫樣達だ。もつとも此處まで來たのが、

都育ちの人達には、既に豪い事なのだから、さうけなすのも惡いが。どうです兎に角二合目まで行かうではないかといふ話になつて一合目を出たが、とても行かれさうにも思はれない人が二三人出來たので、落伍者はすべて赤城畵伯に托して、好い氣になつて二合目まで漕ぎつけたのがK先生、正宗畵伯とお孃さんが二人に、老生とエマと、宿の主人は言ふまでもない。二合目からの眺めはまた格別で、樹海を越して遙かに湖水を望む圖は、日本畵にでもして見たい處である。併し此處ではあまり落ついて休みもせず、さらに三合目まで行つて見ようといふ事になり、又てくてくと出かけた、道は以前通り頗る上等、少しの苦もなく、と云つてさう簡單でもないが、兎に角やがて目指した三合目に着く。此處は眺望もなにもないが、茶店は都會風の結構な家である。隨分渴を覺えるので、此處でサイダを飲み暫く休む。處で折角此處まで來たものだから、もう少し登つて見ようと云つたものがあつた。それも宜からう、併し二人のお孃さんはもうこれ以上はやめよう、と言はれる。このお孃さんの一人は乘馬の名人で、富士廻周の乘馬旅行にも選手として出た位ださうだが、徒歩はまた別の能力である。で、お孃さんは此處で待つて居ると言はれたが、私もそれが宜からうと思つた。何もそんなにわざわざ草臥れるにも當るまい。誰れに賴まれたのでもないから。賴まれたのでないと言へば私だつて同樣だ。加之昨日と昨夜との今日である、少し無理と云へば無理なのである。馬鹿と云へば馬鹿である。

だが人間は兎角馬鹿をやつて見たがるもので、またそれが良いのだ。あまり利口になつてはいけない。それにこれで引きかへしては何だか口惜しい、何處まで行くと極めて歩き出したのではないにしても。聞けば五合目まではこんな道だといふ。そして五合目で吉田口からの道と一緒になるのだといふから、いよいよ行つて見たくなる。そんなわけで又兎も角も三合目を出る。この度は大人四人にエマが附いて來るばかり。少し歩き出してから、五合目よりはお庭へ行つて見ようといふ事になり、その方に歩を向ける。お庭といふのは本道を右に横に入つた處にある天然の庭園で、高さは四合目と五合目との間にあるのださうだ。

道はこれ迄と同じであると聞いたが、さて來て見ると、ごうしてごうして樂ごころではない。もつとも高山に登るにしてはそんなに峻しいといふ程の道ではない、がそれにても決して樂ではない。老生些か、ではない酷く閉口の體である。こんな事では決してお孃さん達の惡口なぞは言へない。まあ大袈裟に言ふと、十歩行つては一と休み、五歩行つては又一と息と云つた形である。それでもごうやら斯うやらウンウン、セイセイ言ひながら登つて行つた。足は只もう引きずるやうにして行くばかりだ。いよいよたまらなくなつて路傍の樹間に身を横たへてしまつた。周圍は所謂處女林の靜かさである。而も若若しい葉色は石楠花の薄紅に依つて彩られて居る。仰向けば、青空はその梢の間から遠く

に併し鮮やかに見える。實に良い心持だ。K先生は心配して傍に居てくれるから、構はず登つて下さい、行く先きは解つて居るからと云つても、離れないで居てくれる。エマは何處を風か吹くかと云つた風をしてごんごん登つて行く。この處親父顏色なしだ。が、ごうも恁うして仰向けに身を投げ出して居る心持と云つてはない。その良い心持の結果は眠りを催して來る。私はこのまま眠つてしまひたいな。なんならこのまま死んでしまへれば猶更ら良いが、と云つたらK先生も笑つて、當人は良からうが、はたは迷惑ですと云はれた。全くそうに違ひないが、他人の迷惑なんぞ、いくらでも我慢する。私は花の下にて春死んと願つた西行よりも、高い山の樹間で死んだ方が餘程贅澤だと思つた。併し斯うしても居られないから、こんな好い氣持だけを只ほんの瞬間だけ樂んで、すぐに一行の跡を追つて、また休み休みやうやくにしてそのお庭なる處に到着した。この邊はもう石楠花の林と云つて宜い位である。それが今丁度眞盛りであるのだから、寂たる山中悉く紅と云つた趣がある。お庭なるものは、要する鎔岩の錯雜して横たはつて居る間に、倭少の赤松と石楠花との入り亂れて生ひ立つて居るので、なるほど人工を加へた庭園の趣をなし、一寸奇觀である。自然が人工を凌がんとして居るとでも言つたら良からうか、少し逆な話はであるが。

さらに仰げば富士の峰は目前に屹立して此方を壓迫して居る。その姿が甚だにくにくしい。一體富

士つて山は怪しからん奴だ、遠方から見ると勾配もゆるやかで色合も良い。しほらしい姿をして居る。が此處まで來て見ると頗る峻嶮な急勾配をなし、その色と云つては毒毒しい赭色を帶びて居る。火山だからそれが當然なのではあるが、何にしても人を欺く事甚しい。半死半生の體で切角此處まで來たのに面白くもない。富士なんかにもう登る事ではない、なんて云ふのは要するに負け惜みか。以て此處まで來るにごれだけ骨が折れたかを證明するものである。併し全く富士といふものに對する幻想は消えてしまつた。半死半生の骨折は、現實の曝露といふ獲物を與へてくれた。私は北齋の描いた富士が、妙に急勾配で赤い色をして居るのを疾うから訝つて居た。が今日始めて、北齋の繪の寫實で、その實際を離れて居ない事が解つた。これも今日の獲ものの一である。そんな事を考へて居る內、正宗畵伯はもう早く歸らないと夜になつて足許があぶないと始めて氣がついて注意してくれた。今居る此處は海拔何千尺といふ高處なので、もう五時半といふに、日の光はまだ赫赫として二時三時の趣がある。爲めに私共はうかうかして居たのであるが、此處から精進まで約四里半の道程、それを五時半から始めるとして、到着は十時か十一時になる。あの山道の而も樹林の間を、燈火も無しで行かなければならないのだ、而も足弱のお孃さんも居る。これは急がずばなるまいと、今更ら驚いて飛ぶやうにして此處から下り始めた。鎔岩の碎けた砂利を積んだやうな箇處では止め度なく足が滑つて、谷底へ

轉がり落ちるかと思つた程であつた。そんな風にして進み進み三合目まで歸つた時は六時を少し過ぎて居た。此處で待つて居た二人のお孃さんを伴つてさらに行手を急いだ。一合目まで來た時には全く日が暮れてしまつた。宿の主人は風穴まで歸れば提灯があるからと云つて、其處までの一里の道程をまたスタコラと急いだ。もう此邊は例の靑木が原で木下闇を——と云つて月は出て居たのであるが、梢に蔽はれて光は足許まで達しない——辿つて行くのである。一行只默默としてはたはたと靴を踏む音のみ聞える。その內に漸く風穴につく。此處からはあと一里二十町で、提灯が得られるからもう心配はないといふので一と安心する。處がそのあてにした提灯はないといふ事で、宿の主人は穴の中で點したあの太い蠟燭を厚紙で覆つたのを二個持つて來て、それを提灯の代りに捧げて行く。今はもう只足許だけに氣をつけて行くのみである。そしてこの心細い燈火をたよりに一行いよいよ默り返つて急ぎ足ですすむ。足の疲れは勿論であるが、それよりも暗がりの不安の方がもつと困る。と云つて如何する事も出來はしない。家なごは一軒だつてありはしない。只勢をつけて進むばかり。もう何町歩いたらう、あと幾町あるのだらうと、そんな事ほか何も考へては居ない。その內にやうやく渡船場まで辿りついた。時はもう十時に近い。見るとかねてごんなに遲くなつても歸るからと宿の主人が約束して置いた船子は私達を待つて居てくれた。普通ならもう疾くに渡しを引き上げて居る時であるから、

この注意が最初になかつたなら、私達はまだ二十町も歩かなければならなかつたのである。此處で私達は生き返つたやうな心持で船にのり、十數分で向ふ岸につき家に歸つた。歸りはしたが、併し疲れ切つて、私はもう食事も咽喉を通らない。僅かに入浴だけして寢てしまふ。

重ねて言ふが、山登りなんて、全く馬鹿のする事だ。私は一合目で引きかへしたお孃さん方の賢明を賞せざるを得ない。糞骨折つて高い處へ行つたとて何の面白い事があるものか。そんな事をするよりもぶらぶら適度に道草でも喰ひながら歩いた方が、いくら好いか知れない。しかし前に言つた通り、これはごうしても負惜みが言はせる愚論かも知れぬが。

次の日は又パノラマ臺といふのへ、K先生が私とエマとを案内するといふので、昨日のことは忘れたやうに、こりずまた出かけて行つた。パノラマ臺といふのは、精進湖畔の一つの峰の頂きの開けた處で、近くは眼下の精進湖から樹海、遠くは遙かに北の方アルプスの連峰を見るべく、快晴の折などは信州の高地を走る汽車の煙をさへ見る事が出來るといふ處である。而もこの臺にのぼる道程は二十三町だといふ。但し可なり峻しい二十三町ではあるが、いづれにしても大した事ではないと云ふので、私達は勇んで登つた。いかにも登りは峻しくはあるが、絶頂へ達するのもわけはない。來て見るとなる程その名に反かない、精進湖は眼下にあつて、小さく蟻のやうにその上を動いて居るものはボオト

である。南西の方を見れば本栖湖がこれも眼下に見える。さらに精進の先きには西湖が横たはり、そのさきに髣髴の間に河口湖が靜かに眠つて居る。若しそれ靑木が原の樹海に至つては、文字通り樹の海をなして廣袤幾里にも亘り、上記の諸の湖畔にまで及んで居るのが瞰下ろされる。富士は東南の方にその高峰を雲の間からつき出し、その下には大室山といふのが行儀よく奈良の春日山と云つたやうな姿をして、副火山らしく控へて居る。西北の方は卽ちアルプスの方面であるが、今は雲深く、ただ連山の重疊して居るのが朦朧と窺はれるばかりである。併しその朦朧たるのが却つて趣のないわけでもなかつた。赤城畵伯はやがて繪筆を取り出し、南西の方なる本栖湖を見下し、その彼方の岸から半島の形に突出した地帶を主とし、その背後の山山と湖水の面とを畵布の上にうつし始めた。この半島にはやがて離宮が置かれる豫定になつて居るのだとか。畵伯が寫して居る間にも、雲は來りまた去り、光景は刻刻に變化するが、時刻の移るにつれて雲はだんだんに深くなる。あまり時刻が移つては昨日の轍を踏む恐れもあるといふので下山したが、それでも可なり長時間を此處に過した。

宿に歸ると正宗畵伯も一二の獲物を携へて歸つて來られる。晩食になる。晩食はいつも同じ味噌汁と鯉のあらひである。鯉のあらひは此處で大した御馳走であらう。此處でなくても都でも御馳走である。が閉口する事には骨がよく取れて居ないので安心しては喰はれない。その上いくら御馳走でも毎

日同じものでは少しく避易する。味噌汁に至つては都のとは全く趣を異にしたもので、一寸私には形容の出來ないものである。都育ちのお嬢さん達は、此食物には閉口して居るらしい。殆ど何にも箸をつけぬ人が多いらしい。誰れも携帶の罐詰で僅かに食をすまし、その間にはこれも用意の菓子を間食にして居る。實は漬ものとても多くはない。湯茶も澤山にはない。といふと如何にも冷遇のやうであるが、決してそんなわけではない。のみならず事實はその反對で、主人は非常な好遇をして居るのである。その出來るだけの歡待をつくして居るのは樣子でも察しられる。が何にせよこんな僻村の一家に十數人のお客樣であるから、特別に人を雇つてあるに拘らず、物質の乏しい此處ではこれ以上の待遇は不可能であらう。事情は誰れも汲んで居るが、何分お姫樣達には、こんな生活と食物とは堪へられない。可笑しくもあり、氣の毒でもある。その中で獨り食事毎にうまいうまいを連發して喜ん居る、若しくは喜ばしさうにして居るのはK先生で、先生が果してどれだけうまいと思つて居るのかは私には解らないが、ああ口で言ふほどうまがつて居るのでもないらしい。まあさうでも言はなければお嬢さん達が一層避易すると思つての一つの方便であらう。眞實にあんなものをうまがるのなら、私は先生の人格を——馬鹿！冗談言つちやいけない、食物と人格——又私のパラドックスになりかけた、やめませう。が私は天下に何も望みはない。うまいものさへ喰つて居ればそれで滿足する。而もそのう

まいものたるや、世間の人の言ふやうに難しいのではない。また通なごは私には藥にしたくもない。只西洋式ならば良いパン、日本流ならば良く炊けた米の飯と香のもの、それで澤山なのである。すると論理上それだけが天下に於ける私の望みであり、願ひであるわけだが、果してさういふ結論になるならそれでも良い。こんな事を考へると私はワアヅワアスなんぞが、湖水の畔で何を喰つて居たらうと下らない事を考へたり想像して見る。食物となるとすぐ私は議論をしたがる。食ひ癖が惡い、が、さて今の場合、私に此處の食物がうまいかと訊かれたら、先づ私はうまいまづいと云ふには、いろいろな條件が出て來るからそれを考へなければならない、とさう云ひたい。その時の事情、腹の具合、氣分、たべ方、器物等、食事にはいろいろな條件がある。また議論を始めた。兎に角私は今の食事をうまいとは勿論思はない、が空氣なごのせいもあらう、運動の盛んな點もあらう、ごんなものでも結構なのであつたから、この食事もまづいとは思はなかつた。ただK先生のやうに積極的にうまいとは義理にも言はれなかつた。K先生のうまいうまいも加何かと思ふが、お嬢さん方の空腹にも拘らず、これが口に入らないに至つては寔に氣の毒である。もつて生れついた都會風に加へるに習ひ來つた性を以てするのであるから、これは致し方もあるまい。何事もさうであるが、趣味も過不及共に不幸である。

翌日は自由行動にするといふので、私は草臥を休めるために、家でごろごろして居た。する事もなくて居ると、いつもさうであるやうに、こんな處へ來ても、私の頭は回顧に傾く。私は一緒に來て居る上級生のYに話しかけた。私が十二三歳の時、京橋の數寄屋橋附近に住んで居たが、其處の堀割に向つた町の角の處にYといふ家があつた。あなたは定めしその家は知るまいが、それがごうした理由か、あなたの家のやうな氣がしてならないのだと、例の癖を出して訊いて見た。するとそれは果してYの家で、自分はその家で生れたのだといふ事であつた。私はよくその家の前を通つて、その兩方の門柱に打ちつけられてあつた名札を今もはつきりと目の前に浮べる事が出來る。それは優しいやや御家流とでも云つたやうな字で、楷書で行儀正しく書かれてあつた。昨日今日の事はすぐに忘れてしまふが、凡そ四十年も前のこんな事は却つてありありと覺えて居るのは不思議である。私の回顧はそれからそれへと移つたが、今これも此處へ來て居るトンチヤンの家――と云つては失敬だが、みんながさう言つて居るから、私にもさう言はして貰はう――その方が親しみもあるから――そのトンチヤンの家もこの邊にあつたので、その頃よく私はお使にやられた。その時其處に居たおぢいさんの顏も今朧ろに思ひ出される。それから今同席のクラの家も知つて居た、これはもう青年になつてからの事であつたが、折折其家に出かけたものであつた。その子供時代のさうした家家の子達と、今日の自分が

恁うして一所に、こんな山の中に來て居るのも何かの緣だらうと、少し佛臭い考になつた。けふは本を讀んだり、こんな空想に耽つたりして、一日を過してしまつた。

明日は出立といふので、みんな荷物の片づけを始める。宿の主人は正宗畵伯の製作を荷づくりするために二人の若い人を指揮して世話をしてくれる。主人は正宗畵伯を先生先生と云つて敬意を表して居る。私も先生だから先生と云つてくれれば良いがなあと願つて居るが、一度もさうは言つてくれない。先生と言はれるにはごうも畵を描くに限る。惜しい事をした。併し私には口惜くても一と筆も書けない。こん度來る時の間には合はないが、こん度生れたら畫家にならうと思つた。こん度生れたらは、甚だ氣の永い話だが、萬事はそれ位ゆつくり考へなけりや駄目だ。

さて最後の日が來た。ごうも往き道のやうに乘りもの盡しに、折折山道を歩かせられた分には、この大勢でとても荷物携帶ではやり切れまい。いや不可能の事だ、といふので自動車でといふ事になり、それも中央線でなく、御殿場まで一と息に出ようとなつて、多人數ではあるが、それを二臺に分乘する事にした。豫定の時刻を後れる事三十分ばかりで、一臺が來さらに十分程後れて、次の一臺が來た。それが十時に近い時であつた。私の乘つたのは後れた方の一臺であつたが、進む事十分位にして車は忽ちパンクしてしまつた。この邊の自動車はみな役座なものばかり使つて居ると見え、故障ばかり起

して居るさうで、パンク位は素より覺悟の前だ、時間もそれを豫期して餘裕が取つてあるのだから驚かない。完全な修理には二十分位を要するが、この先きに御殿庭といふ天然の庭があるから、其處を見物して居てくれろ、その內には必らず完全に整へて行くと運轉手がいふ。ごう仕樣もないから、その言ふままにおとなしく、十五六分も歩いて行くと、なるほど路傍に自然の庭と思はれる處があつた。丁度富士のお庭と同じで、鎔岩の具合よく露出した間に、若木の茂つて居るのである。が、富士のお庭より遙かに見劣りがする。石楠花の紅のないだけでもかれには及ばない、況んや規模が小さい。が、その路の傍には腰掛なども設備されて休息の出來るやうになつて居るので、其處に腰を下す、甚だ悠長なものだ。併し其處でキャラメルを一個口に入れたかと思ふと、忽ち自動車がやつて來たので、すぐに飛び乘つて、すぐに飛ばす。こん度は故障の起りさうもない景色だ。行く道は、樹海の一端を通過し、或は廣びろした野原に出で、或は松林の間を行く。その間の風光の變化は、まことに應接に暇のないほどで、殊にその中心となつて居るものは富士で、すべてがその裾野の內に連續して居るのである。中には心持の良い平原がある。こんな處に住んだらば宜からうと云つたら、誰れかが此邊も今度設立される土地會社の分讓地となつて居るのだと教へてくれた。如何にも其邊は人間臭のしない處なので、酷く感心して居ると、運轉手はこの邊のものださうだが、口を出して、以前は山賊がこの邊の

洞穴に住んで居て、里に出沒し、自分のお婆さんなんかはそれに縛られた事さへあつた、が今ではもうそんな事はないといふ。山賊に出られては大へんだ。先日行つた富士の風穴の邊には熊が出るさうで、宿の主人も一度ならずその姿を見たと云つたが、良い處で人間臭もないと思へば、そんな物騷なものが出る、ごうも二つ良い事はないものである。兎角する內に自動車は里近い處に來、やがて鳴澤といふ此邊での要所である村に入る。其處を通過して暫らく進むと、こん度は河口湖が見えて來る。湖上から說明された敷島の松といふのも見えて來る。前に通つた細い狹い町を自動車でうねうね、ゆるゆると通つて、やうやく町外れに出ると、先發した自動車が其處で例のパンクをして弱つて居る。私共はそれに乘つて居た正宗壽伯の、困つたと云つたやうな顏付をして居るのを、如何にも同情が無ささうな笑顏をして見下しながら、横を通つて行つてしまつた。

自動車は吉田口への往來を横切つて富士登山口なる淺間神社の前を過き、これこそ稀に見るとも言へる程平坦坦たる道を走つて東南の方へ進む。その內に山中湖が見えて來る。これで私共は五湖を悉く見たのであるが、五湖それぞれの趣があり、この山中湖は一番明るい感のする處と思つた。從つて行樂の場所としては此處が尤も適して居るかも知れない。次では河口湖も好適の所と思はれる。併し前にも言つたやうに、山の奥なる水の寂寞を味はうとするには——そしてそれが山間の湖水の特長で

あらうが――西湖から奥、精進、本栖まで入らなければなるまい。自動車は暫らく、左手に山中湖の隱見するのを見て、だんだん登り坂にかかる。その内に運轉手はもう此邊が峠だといふ。峠とは籠坂峠の事であるが、併し其處は一向に峠らしくなく、只少し計り勾配が急になつて居るのみで、先づ平地と異ならないと云つても宜い。籠坂峠の形勝はかねて聞き及んでは居たが、これでは如何にも平凡な處だと思つた。すると忽ち道は一と屈折する、と忽ち身は幾百丈の頂きにあるのが解つた。車外を見ると道は平な頗る良い道であるが、それが紆餘曲折して、遠い遠い遙か下の谷底にまで達して居る。直下に見下ろしたら――何と云つて良からう金輪際に及ぶとでも言ふ處か、深く低く、その及ぶ處を知らぬやうである。同時にこの谷を間にして彼方に富士の裾は、遠く蜒蜒として、これも涯を知らず、やがて伊豆方面の諸峰に連つて居るのであらう、その末は雲か山か、それとも海か、いづれであるか全く見分けがつかない。廣さと云ひ、遠さと云ひ、また深さと云ひ、文字通り目の覺めるやうである。先づ雄大とでも常套の語を用ひて片づけてしまふより外仕方はあるまい。私のやうな貧弱な筆の持主にはこれ位雄大な景色を見た事がないと言つて置くより、叙述の方を知らない。車はこの頂上からうねうねと曲折して上段の道と下段の道とは握手すら出來さうな程接して居るが、而も其處まで達するには少くとも數町を走らなければならぬ。そしてその谷底に達すると、それが須走り口への本道にな

つて居るのであるが、この急坂の中途に山梨縣と靜岡縣との境界がある。谷底に達して後は全く靜かな清閑な田舍道になり、須走り以下二三の瀟洒な村を過ぎ、十二時を過ぎる二十分ほどに御殿場に著く。

が、あのバンクした先發の車はどうしたらう。待てど暮せどやつて來ない。自動車の輻湊する、そして富士の登山者でにぎはつて居る此處に、自動車の音のする度に、それかと眼を睜つて見るが、一向やつて來ない。もう一時間も經つが、まだ來さうな樣子もない。殆んど待ちあぐんだ後、私達の車の運轉手は迎へに行つて來ようと云つて出かけて行つた。私は多分の心配を抱き始めた、あの坂道で何か異常な事でもあつたのではないかと。さうでない限りどうしてももう來なくてはならないと、考はさう結論させる。私達はもう汽車の切符まで買つてしまつたがまだ來ない。殆んどもう諦めてしまつて居ると、やうやく一臺の――出發の時のとは異つて居る――自動車で一同が到着した。待つ身につらきといふのは良く言つた文句だ。私達は到着した車を取りまいてしまつた。聞けばバンクする事前後三回、殆んど顚覆せんとする事一回、吉田まで引きかへして車をかへて、やうやく斯の通りとある。まあそれでも無事に來られたのは幸と、豫定の汽車に乘り込んだ。汽車に乘り込めばもう安心、同時に平凡で、何も記事はない。精進行並に富士北麓の迂回旅行は大略こんなものであつた。

凡人崇拜

定價壹圓五拾錢

大正十五年二月十五日印刷
大正十五年二月二十日發行

著者　戸川秋骨

發行者　北原鐵雄
東京市小石川區表町百九番地
書製代スルア社會資合

印刷者　赤羽正己
東京市神田區今川小路一丁目二番地

發行所　東京小石川表町一〇九
合資會社アルス
電話小石川三五七〇番
振替東京二四八八八番

季節の窓

●散文集● 北原白秋著

詩壇の巨星の鋭き觀照と靜なる思索風懷隨筆感想百三十餘章を輯む

靜かに眺め、深ふふかと觀ほれ、さうして私は獨りで安らかに自分の樂しみを樂しみとしてゐよう。わたくしの書齋の窓から、いつもかうした季節の光と風とを吸つてゐよう。その香ひと色とを。

季節ばかりを觀るのではない。凡てにわたくし自身を觀よう。さうしてわたくしの周圍の人と自然とに深い流通を求めよう。わたくしは今、閑かな、動かないところに心を据ゑてゐたいと思ふ。——著者——

本書の裝幀は、著者自裝にかゝり藝術さながらの香氣にして清新、所謂世の裝幀者のそれを離るること高く、遠く、著者の風格と氣品は本書によつて窺はるるであらふ。

定價貳圓八拾錢・送料八錢

前田夕暮著

綠草心理

・詩文集

前田夕暮の散文『綠草心理』に到つては、わたくしの賞讃措かざるものである。彼は今日に於て彼の本質たる鑛脈をかちりと掘りあてた。——彼自身の尿の美を透明なる硝子の尿壺に見、その尿壺にひそかに菜の花を挿して寢臺の下に忍ばせたといふ文意の稚態は、わたくしを心から微笑せしめた。——少くとも彼の散文は短歌よりは本資的であり自然的である。何の粗も拙もない。立派な詩文である。彼は寧ろ詩に行くべき人では無いか。『鞠つきも』おそらく傑作であらう。ただ、この上はいかにして彼の藝術を境涯的に挿し進めるかと云ふことである。わたくしの友情は興趣ふかく彼に向つて微笑してゐる。(北原白秋氏、季節の窓より)

北原白秋氏挿畫
恩地孝四郎氏裝幀

定價貳圓・送料八錢

土岐善麿著

朝の散歩・詩文集

朝の散歩の靜さ、空の高さ、土のあざやかさ、最近の著者が多忙のうちに求め得たる悠々たる簡索の生活淡々たる明快な心境は、その人に氣品の高さを加へ、その文に情趣の豐さを加へた。そこには都市居住者の懷しい追憶があり、田園生活者の悅しき体驗がある。これ實に歌壇の重鎭土岐善麿氏最初の散文集、收むる處長短三十餘篇。全篇悉く純清にして清爽。最近文壇の一大收獲である。

定價壹圓八拾錢・送料　六錢

詩歌の話

洗心雜話

北原白秋氏著

詩歌の玄妙、極致、藝術の法悅境は筆舌によりて說き明かさるるものではない。不言不語の間に於ける傳心であり、說法であり、感得である。本書は日本詩壇唯一の巨匠白秋氏が、折にふれ、時にのぞみ、心に感づるままをわかりやすいことばでわかりやすく、面白い興味深い澤山の例話で、詩歌とは、どんなものか、詩歌は如何に味ふべきか、詩歌の作り方はどうすべきか心の据え方、物の見方と云ふ樣なことに至るまで、著者多年の經驗を以つて、詩歌道の祕奧を說かれたものである。

讀むで面白く、さうして自づと珠玉の如き言葉に、誰れもが心をひかるるものは本書である。

定價壹圓貳拾錢・送料拾參錢

感想集

春を待ちつつ

島崎藤村著

名著『飯倉だより』が出てから早くも三年の歳月が過ぎた。さうして著者の心境は愈々高く、愈々深く、愈々澄み透つて來た。

著者の觀想の世界は、藝術に對して、或は輓近社會的推移の急激なる社會萬象の上に、溫和なる靈性の底から鋭利なる凝視を向け、多年の經驗と蘊蓄とを傾けて、文章玉の如く、泉の如く、溢れ出でた感想五十餘篇、人生の辛酸を嘗めつくして溫き春を待たんとする著者の心境はすべての人々の上に、暗流の烈しき世界のうへに、香はしき春を待ちのぞむ著者の祈願と熱意とが全卷に漲つてゐる。

——山本鼎氏裝幀・四六判美本——

定價壹圓五拾錢・送料八錢

感想集

飯倉だより

島崎藤村著

金のやうな靜けさと光とを持つた藤村氏の感想集である。むつゝりむつゝりと、然し誠實さのこもつた口調で、其書齋に於ける東西古今の文藝批評を聞く思ひがする。この一書を通讀すると、氏の性格、氏の人生觀といふやうなものが、字句の間に一々脈絡を保つて生々として來るのを感ずる。

「朝を思ひ、夕を思ふべし」と云つた芭蕉の言葉に思ひ入つた著者が、「初戀を思ふべし」と虔ましく言ひ放てるのに、彼の「新生」を書いた著者が、パスカルの「心胸には道理に知られない道理がある。」といふやうな言葉を抄錄してゐるのも意味深いことだ、ごの頁を開いて見ても、人間苦に徹した人でなければ現はし得ない言葉……全人格……が嚴肅に迫つて來る。そしてその明澄な文章は、靜かな、ものの深さ、短かきものの鋭さと云ふやうな事が泌々と味はれる。

數行の短い文章にも生命の輝きがある。讀むよりも味ふべき心の糧として江湖に推奬する。

——山本鼎氏裝幀・四六判美本——

定價壹圓五拾錢・送料六錢

感想集

婦人の立場から

三宅やす子著

男女の平等、自由の平等、一箇の人間としての生存、さうして、新時代と共に歩み、生き、明日に生んとする近代女性は何を要望し、何を希求してゐるであらうか。

本書は女流思想界の明星たる著者が温健質實なる思念と考察と、社會心理のうへにたちて、自由なる女性の立場から、戀愛に貞操に、結婚に社會萬象の上に放つた深刻なる、批評であり指導言である。女性の立場の如何なるものであるか。女性を理解せんとする男性、自已の立場を闡明せんと欲する女性の共に必讀すべき名著である。

定價壹圓五拾錢・送料六錢

感想集

私達の問題

三宅やす子著

女性は目醒めて來た。長い間の屈辱的生活から。無自覺の忍從から。人としての女性、社會の女性として目醒めて來た。そこに悲痛な近代女性の惱みがある。著者が此等の惱みを『私達の問題』として論評されたのが本書であつて、二十三篇の論文と、二十一篇の感想小品とが收められてゐる。

婦人問題は、獨り女性のみの問題ではない。女性の惱みは男性の惱みであり、社會全体の惱みであり、婦人問題の解決は實に社會問題の解決とその途を同じふするものである。著者のこの論集は女性を激勵する言葉であると共に、全社會が傾聽すべき重大なことがらである。

定價壹圓五拾錢・送料六錢

砂に書く

・感想集・　與謝野晶子著

優婉典雅の詩人尖鋭率直の社會批評家晶子夫人の二年間に渡る感想を聽け

與謝野夫人が一面に優婉典雅の詩人であると共に、一面に率直尖鋭の社會批評家であることは、世の既に認識する處ですが、而かも夫人の内部生命は常に若々しく不斷の教養と生長とを續けて止むところを知りません。近時の急激なる世相の變化に對し夫人は如何なる立場より如何なる感想を持たれてゐるか。また夫人の日常實際の生活は如何なるものか。之を窺ひ得るものは本書です。收むる處の八十一篇、何れも夫人が最近の二年間、多方面の題目に亘つて一家の意見を述べられ學窓へ家庭へまた一般の新人へ種々の新しい暗示を提供されて居ます。

裝幀・廣川松五郎氏・四六版上製本

定價壹圓八拾錢・送料八錢

536
177

終